

大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善 (第一報)

「婦人之友」誌の特徴と住生活関連記事の経年的動向

久保 加津代

(大分大学教育学部)

平成4年1月13日受理

Improvement of the Quality of Life in "Fujin-no-Tomo" between 1908 and 1934 (Part 1)

Characteristics in "Fujin-no-Tomo" and Chronological Trend of Reports on Living Lives

Katsuyo KUBO

Faculty of Education, Oita University, Oita 870-11

"Fujin-no-Tomo" between 1908 and 1934 showed the following characteristics.

- 1) The pictures of the modern family lives were expected.
- 2) Its readers were middle-class women living in the city. But they were very earnest on the improvement for living lives.
- 3) There were many reports by the reader.

By analyzing the reports on living lives, the following conclusions were obtained;

- 1) There were many reports on the ways of living, housing views and floor plans.
- 2) Although in "Taisho Period" the modern living lives were searched, in "Showa Period" the reports on the contrivance increased.
- 3) After 1935, this tendency became strong.

(Received January 13, 1992)

Keywords: "Fujin-no-Tomo" 「婦人之友」, Democracy of "Taisho Era" 大正デモクラシー, improvement of the quality of life 住生活改善, middle-class urban house 都市中流住宅, housewives 主婦.

1. はじめに

大正デモクラシーの文化的高揚を背景に、明治のおわりから大正・昭和のはじめにかけて、わが国の生活様式は大きく変容した。

住宅様式の変容にもめざましいものがあり、木村はこの時期の様子を、明治末期にプライバシーの尊重が主張され、大正初期には中廊下型住宅が成立し、1920年代には居間中心型住宅様式が完成、昭和に入ると中廊下型住宅様式と居間中心型住宅様式は融合していく¹⁾と論じている。この時期の住宅様式の変容過程に関しては、専門家の論文や図集、競技設計や博覧会・展覧会などの作品を分析したものがいくつか報告されているが、実際に生活者が住み方や住居観をも含めて住様式の変容過程にどうかかわったかという点に関する報告は少ない。木村はこの中廊下型住宅様式と居間中心型住宅様式の融合を

「兩住宅様式の普及に伴う『様式の弛緩』²⁾と説明している。内田はあめりか屋の商品住宅を西洋館の和風化という視点でまとめている³⁾。しかし、この融合のプロセスは、①専門家の理論や作品が生活者におよぼす影響と、②実際の住み方や生活者の住居観、の面からさらに明らかにされる必要がある。なぜなら、①建築の中でも住宅は専門家の理論だけではなく実際に生活するものの住み方や住居観によって発展するという性格が強く、実際にこの時期には生活者の積極的・主体的なかわりが見られるからであり、②専門家の理論や作品が層としての生活者に影響をおよぼしはじめた時期だからである。

そこで、この研究の目的は「婦人之友」誌(以下「婦人之友」)という一つの資料を通して、住み方と住居観の実態を明らかにし、これをふまえて「婦人之友」読者である主婦たちがこの時期の住様式の変容過程にどうか

かわったかを考察することである。

本第一報では、上記の分析を進めるために資料としてとりあげた1908年～1934年の「婦人之友」の資料としての特徴を明らかにし、住生活に関連する記事の内容を経年的に分析することが目的である。

2. 方法

(1) 対象年代

1908年～1934年の「婦人之友」に掲載された住生活関連記事を主な資料とし、補助的に1935年～1944年のものも用いる。大正デモクラシー期をいつからいつまでとみるかは専門家の間でも議論がある⁴⁾が、「政治経済的には日露戦争の終わった1905年から護憲三派内閣による諸改革の行われた1925年まで⁵⁾とみてよい。しかし、本報では政治経済というよりも、都市中流階層の住生活をみるという点から「時期により担い手を交代させながら次第に国民の中に根を下ろしていく⁶⁾過程もみるために、1925年を経て文化的高揚が生活の中に定着していく1934年までの「婦人之友」掲載記事を中心にみていく。なお、「婦人之友」の創刊が1908年であることから、分析対象は1908年から1934年までとする。

(2) 分析の視点

住宅プランと記事の内容をみていく。

プランは全部で155例みられる。専門家(同潤会8例を含む)の設計したものは54例、読者である主婦の設計したものは75例である。残る26例は設計者の明記されていない住宅の紹介であったり、古い住宅の住みこなし方の例・外国住宅の紹介などである。分析にあたっては生活者である主婦の設計したものに注目して、住様式の変容にかかわる要素を抽出する。

記事についてはプラン分析から抽出された項目について調査し、専門家・記者による啓蒙の状況と読者が日常生活体験の中から住様式の変容過程にかかわった実態とを明らかにする。

3. 結果および考察

(1) 「婦人之友」の概要

1) 創刊当時の状況

「婦人之友」は羽仁もと子が「家庭之友」の編集方針を継承し「家庭女学講義」を改題するかたちで、1908年に創刊した月刊誌である。時あたかも日清・日露の両戦争を経て、わが国が近代資本主義国家への成長を進め、都市に働く人々が急速にふえていった時代である。なかでも官吏・教員・医師・会社員などは新しい階層—都市

の中流階層—を形成する。「婦人之友」はこうした新しい都市の中流階層の主婦を対象に⁷⁾、キリスト教の思想を背景にしながら新しい家庭生活像を求めて創刊された「生活を考える雑誌」⁸⁾である。創刊当時の発行部数は記録がなく「雑誌の読者の少ない当時のこと、多分2～3千部も発行してはいない」⁹⁾という同業者の推察を¹⁰⁾と¹¹⁾するほかないが、戦前には6～7万部、戦後は12～13万部を発行していた¹⁰⁾。

2) 当時の女性や家庭に関する出版物の状況

「羽仁もと子—生涯と思想」¹¹⁾、「20世紀初頭女性へのメッセージ」¹²⁾を参考に、当時の女性や家庭に関する出版物の状況をみれば、明治末から大正にかけては女性解放の気運が高まり、堺枯川の「家庭の新風味」、「婦人問題」が出版され、ペーベルの「婦人論」が訳出される。婦人雑誌も「女学雑誌」、堺枯川の「家庭雑誌」、「婦人之友」の前身といわれる「家庭之友」が創刊される。「六合雑誌」はこの時代を「婦人論の再燃期」と評しているが、前二者が婦人解放思想の強いものであったのに比し、「家庭之友」→「婦人之友」はより家庭生活に密着した雑誌であった。明治の末には「新婦人」、「新女学」、「女学世界」、「淑女かがみ」、「婦人くらぶ」、「女子文壇」、「婦人画報」、「婦人世界」などがあったといわれるが、「婦人之友」はこれらの雑誌とも少し趣を異にしている。これらの雑誌が封建的家制度を肯定して家庭生活に関する実用的記事と読み物を主な内容としていたのに対し、「婦人之友」は新しい近代的な家庭像を求めて発行されたものである。大正時代に入ると「婦女界」、「主婦の友」、「婦人倶楽部」など発行部数40～60万部を誇る大衆的な女性誌が次々創刊され、「婦人公論」も出る。「婦人之友」も大衆性と啓蒙性をめぐって岐路に立たされるが、結局ある程度大衆性を無視しても理想を掲げてすすむことになる。「日本婦人問題資料集成」の編集者丸岡秀子の「観念に墮せず技術に停滞せず読者との協同によって、その主張を生活の中に実現してゆく、この実験精神こそ羽仁もと子の原点であった」という評は「婦人之友」の特徴をよくあらわしている。

3) 掲載記事の特徴

記事の内容には、いくつかの特徴がある。

i) いちばん大きな特徴は、「近代の家庭が要求する主婦」(1911)、「生活改革を主題としての座談会」(1930)など、羽仁もと子の思想を反映して近代的・合理主義的な家庭生活像を求めていることである。

ii) 二番目には家庭生活のあり方や女性の生き方にかかわること、衣・食・住の問題や家計の合理的な運営、

大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善（第一報）

保育や子育てなどのほか時事問題、文芸まで広範な内容を含んでいることである。「生活を考える雑誌」という以上に女性のための総合雑誌という性格が強かったものと思われる。このため、住に関しても単に技術的な側面だけではなく、住み方や住居観を採取できる。

iii) そして三番目には、社会状況とくに社会経済的な状況や戦争の影響を強くうけて、内容が時代とともに変化していることである。創刊当初のものは、「質素なる米国の家庭」(1909)、「英国の家庭生活」(1909)、「理想の生活」(羽仁もと子：1908～1909, 1911)、「良家風良習慣」(1908)など外国やわが国の生活を紹介したもの、「心得」、「……のをしへ」、「家政問答」など啓蒙的な性格の記事が目につくが、大正から昭和初期にかけては、「今後の社会はすべての婦人に職業を要求する」(1913)、「普通選挙の話」(吉野作造：1921)、「男女共学問題」(1921)、「自由恋愛と自由離婚」(1922)、「婦人参政権」(らいてう：1927)、「家庭婦人の社会的進出」(1929)など社会性の強いものになり、家庭生活の扱い方も「文化生活特集号」(1921)、「家庭の民衆的改造」(1921)、「我らの描く新家庭」(1921)など、進取の気鋭に満ちたものとなる。さらに「バラックにセッソルして」(1924)、「一村拳って台所改善を」(1929)、「小学校改良案一校長のない小学校」(1930)、「五軒が共同して炊事をする私たち」(1930)など、具体的な生活改善の経験がとりあげられる。しかし、昭和も十年代に入ると、史上の女性の最初に「神功皇后」(1935)が登場したり、「良国民になりませう、大国民になりませう」(1936)、「国土安穩」(羽仁もと子：1937)、「戦時下家庭生活読本」(1942)と戦時色の濃いものとなっていく。家庭生活についても「生活の隅々から無駄をなくそう」(1937)、「非常時対策生活革新の実例」(1937)、「非常時家計体制」(1938)、「よき国民食よき国民服」(1941)など、新しい生活を求めるという雰囲気はみられなくなる。全体の頁数も少なくなり、1944年には合併号のみみられるようになる。

iv) 啓蒙的な性格が強いことも「婦人之友」の性格である。思想家や専門家が直接執筆にあたっている。当時の女性は、書物や新聞に親しむという機会も少なかったであろうから、「婦人之友」は情報源として、現在の一女性誌としての「婦人之友」とは比較にならないほど大きな役割をもっていたものと考えられる。住生活の面でも、あめりか屋の橋口信助が1916年に「主婦層も読める家庭雑誌の香りのする住宅専門雑誌」¹³⁾として住宅改良会機関誌「住宅」を発刊するほど、当時の住生活論議は専門家だけのものだったので、「婦人之友」が専門家

による啓蒙記事だけではなく、主婦の体験や設計プランまでを議論していることは、発行部数もそれほど多くなく、広がりも大きくはなかったかもしれないが、住生活の問題の議論に生活者が直接参加するという点で、意義あるものだったと思われる。

4) 読者層

読者の層に関しては、前述の「羽仁もと子」¹⁴⁾や『婦人之友』の家計記事による読者層の属性に関する検討¹⁵⁾に詳しいが、その特徴はいくつかにまとめられる。

i) 第一の特徴は読者層の主流が都市の中流階層であるということである。大正期以降、読者層の幅は創刊時より少しずつ広がっていくが、都市の中流階層が主たる読者層であるという点では一貫している。記事の表題も「質素なる中流の家庭に要する家具一覧」(1909)、「中流の衣食住の特集」(1912)、「中流の衣食住はかく改めたし」(1914)、「中流の住宅はいかに設計すべきか」(1916)など中流を意識したものが多く、経済的レベルについては「主婦之友」読者より少し高い¹⁶⁾という報告もあるが、経済階層や職種や学歴の面で「主婦之友」などの読者と「婦人之友」の読者にそれほど大きな差があったとは思われない。「主婦之友」は小学校卒業程度の学力でわかることをめざしたといわれるが、「婦人之友」にも「るび」がふってある。

ii) 「婦人之友」読者はむしろ、もと子の思想を受けとめた精神的態度¹⁷⁾に特徴をもっていたと考えられる。後(1930年)に「全国友の会」を組織し、独自の生活合理化運動を進めるほど研究的・実践的な生活姿勢とエネルギーをもった層であった。「婦人之友」読者は中流階層の中でも生活の近代化や合理化に熱心な一部の層であったといえる。

iii) 三番目には彼らの住宅規模が「中流住宅」の規模とほぼ一致していることである。「婦人之友」に掲載さ

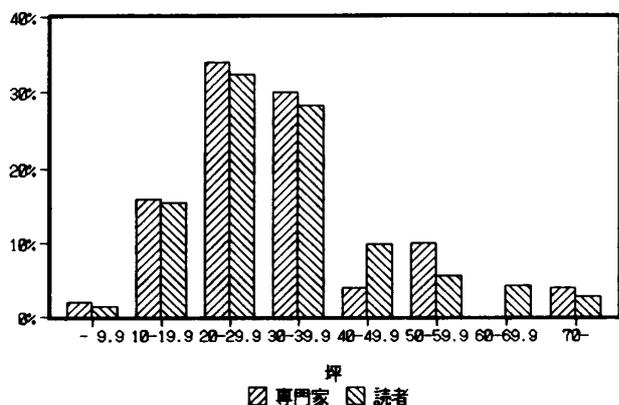


図 1. 設計者の種類別住宅規模の分布

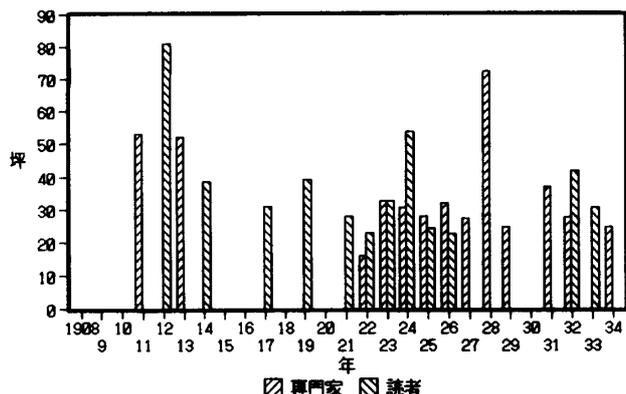


図 2. 年代別・設計者の種類別住宅規模

れている住宅プラン（極端な簡易住宅や特殊な大邸宅を除く）の規模は図1，図2に示すとおりである。

専門家の設計したものは6.7坪の簡易住宅から76坪の大邸宅におよぶが平均は31.9坪であり，読者の設計したものは9坪から81坪までで，平均32.0坪である。全体の平均は31.9坪であり，専門家と読者による規模の差はほとんどない。このうち70坪をこえる大邸宅は5例，15坪にみえない小住宅は6例あるが，それらを除いてもそれぞれの平均は31.0坪，31.8坪となる。年代別にもばらつきはあるものの論ずるほどの傾向はみられない。大正・昭和を通じて住宅改良の最大の対象となった¹⁸⁾『中流住宅』の中核は，30坪前後¹⁹⁾であり，「婦人之友」掲載住宅プランの規模はほぼこれに一致するということができる。

生活者が実際の生活のなかで住様式の変容にどうかかわったかをみていくという目的のためには，さらに広範な生活者について検討する必要がある。「婦人之友」の読者のみを対象にするということは，一つの限界ではある。しかし，「婦人之友」の読者層が当時の住様式の変容過程にかかわる一つのエネルギーであったことは考えられる。

(2) 「婦人之友」にみられる住生活関連記事

1) 住生活関連記事の割合

住生活関連記事は全部で554件（1802頁）あり，「婦人之友」の記事全体に占める割合は微々たるものである。頁数の割合をみると（図3），年によって多少のばらつきはあるが，いちばん多い年で6%であり，年によっては1%に満たないものもある。1920年に極端に少ない（理由はわからない）ことを除けば大正年間には住生活関連記事の割合が比較的多く，昭和に入ると少しずつ減りはじめ，とりわけ1935年以降は少なくなる（1908年から1910年については総頁数が調査できていない）。



図 3. 記事全体に占める住生活関連記事の頁数の割合

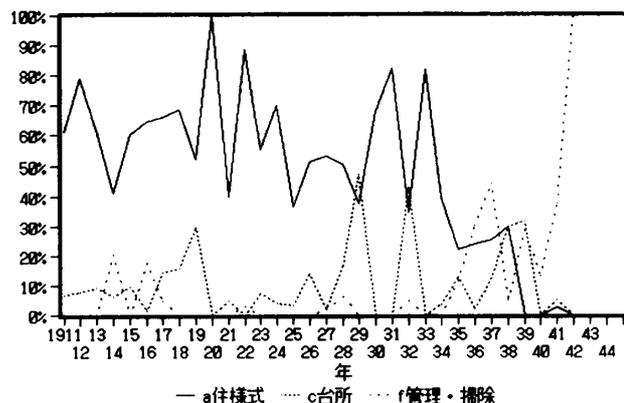


図 4. 住生活関連記事に占める内容別頁数の割合

2) 住生活関連記事の特徴

記事全体に占める住生活関連記事の割合は決して多くはないけれど，記事の内容が単なる住宅の外観の紹介や掃除や整理整頓の仕方・設備に関する知識といったようなものばかりではなく，プランや住み方・住居観をとおして住様式の問題に言及したものが多い。この点も「婦人之友」の特徴であり，これを分析対象に選んだ理由の一つである。

3) 住生活関連記事の内容別の経年変化

記事の分量だけではなく，扱われている内容も経年的に変化している（図4）。

住生活関連記事のなかで，住宅プラン・住み方・住居観などが採取できるものを，a.住様式の記事として本研究の主たる分析対象とした。住生活関連記事全体に占めるa.住様式の記事の比率はかなり大きい，経年的には1935年をすぎると，その比率は急に少なくなる。この研究の分析対象を1934年までとした大きな理由である。残りの記事を，b.保健・衛生，c.台所，d.他の設備，e.インテリア・照明・家具，f.住居管理・掃除・整理整頓，g.住宅の工法や構造に関する技術的な問題，h.住居費・住宅問題，i.都市問題，j.他・

大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善（第一報）

住生活全般にわたるもの・分類不能のもの、に分類したが、f. 住居管理や掃除・整理整頓 に関するものは a. 住様式 の記事とは逆に 1935 年ころから多くなる。内容も初期のものは和風住宅の管理のわずらわしさを問題にしているが、しだいに整理整頓の仕方に片寄っていく。1935 年以降のものでは「隅から隅まで徹底的に整理された家」(1936)、「無駄無しの家・生活の端々に細かな工夫」(1937)、「整理下手の家の整理手ほどき」(1942) など工夫を重視するものが多くなり、時代を反映して「非常時対策生活革新の実例」(1937) などという記事がふえていく。b. 保健衛生, c. 台所や d. 設備, e. インテリア・照明・家具の項目などについても同様のことがいえる。創刊当初から大正時代のもは新しい生活様式を積極的に求めていく姿勢が強いのに対し、昭和に入ると工夫に関するものが多くなり、とくに昭和十年代以降は「最も無駄のない能率的な照明を」(1939) など工夫に終始する。

4) 住生活関連記事の形式

「婦人之友」の記事は著者別に大きくつぎの三つに分けられる。

i) 読者の記事

「婦人之友」の大きな特徴ともいえるものだが、読者（おもに主婦）の投稿記事が多い。158 件 434.4 頁におよぶ。実践的な生活研究を進めている読者が多く、その体験を交流するものが多い。編集部も「読者と懇親を結び、お互いに家庭のことを研究したい」²⁰⁾と投稿欄・相談欄・競技課題を設けている。まさに「読者との協同によって生活のなかに実現していく実験精神」²¹⁾である。住生活関連だけをあげても「住みよき家の間取り図」(1914)、「何んな住宅が欲しいか」(1921)、「理想と実際の小住宅」(1922)、「住宅建築問答」(1923～1924)、「台所の工夫いろいろ」(1928)、「理想の我が家」(1933) などの企画がみられる。本研究は生活者である主婦が、日常の生活の中での検証を経て新しい住様式の形成にどうかかわったかをみるのが大きな目的であるため、「読者」の記事が重要な意味をもつ。また、記事の中に、主婦が設計したプランがたくさんみられることも「婦人之友」の特徴である。これも「婦人之友」を分析対象に選んだ大きな理由である。

ii) 専門家による記事

専門家による啓蒙的な記事も充実しており、142 件 576 頁におよぶ。著名な建築関係者だけをあげても橋口信助・伊東忠太・佐野利器・大熊喜邦・遠藤 新・今和次郎・市浦 健など多彩な顔ぶれである。当時の住生活

に関する専門家の啓蒙の状況を知るといっても貴重な資料である。

iii) もちろん記者による新しい住宅や住生活の紹介・提案記事も多い。254 件 792 頁である。

4. 要 約

大正デモクラシー期の住生活の実態分析をととして、生活者である主婦たちが、住様式の変容過程にどうかかわったかを考察するという目的のために、この時期の「婦人之友」を分析した。「婦人之友」はつぎのような特徴をもっている。

1) 「婦人之友」は近代的な家庭生活像を求めており、新しい住様式の創造に積極的にいかかわろうとする姿勢がみられる。

2) 「婦人之友」の主たる読者層は都市の中流階層であり、彼らの住宅規模は「中流住宅」の規模とほぼ一致する。しかし、「婦人之友」の読者は精神的態度の面で特徴をもっており、中流階層のなかでも 1930 年に「全国友の会」を組織するほど、生活の近代化・合理化に積極的・研究的姿勢を示し、実践のエネルギーをもったものが多かった。

また、この時期の住生活関連記事に関してはつぎのようにいえる。

1) 記事全体に占める住生活関連記事の比率は決して多くないが、住宅プランや住み方・住居観に言及したものが多。

2) 読者の投稿記事が多いので、生活者である主婦の家族本位志向・簡素化志向などの住居観が採集できる。

3) 「婦人之友」は社会状況による影響の大きな雑誌である。大正時代には新しい近代的な住様式を志向するものが多いが、昭和に入ると工夫に関するものが多くなる。1935 年以降はこうした傾向がますます強くなり、新しい生活を求めるという雰囲気はみられなくなる。

資料収集にあたり、福岡教育大学秋山晴子教授のご協力をいただきました。深謝します。

注および引用文献

- 1) 木村徳国：北大工学部研究報告，21，4～12（1959）。中廊下型住宅の社会的な成立は 1916 年，居間中心型住宅様式は 1922 年東京平和博住宅展示会（14 棟），大阪桜ヶ丘住宅展示会（10 数棟）によって完成し，その後中廊下型住宅と居間中心型住宅は，それぞれ「住みよき」，「ありたき」住宅様式として存在していたが，1931～2 年頃に両様式は融合するとしてい

日本家政学会誌 Vol. 43 No. 12 (1992)

- る。
- 2) 木村徳国：前掲1) 20
 - 3) 内田青蔵：あめりか屋商品住宅，住まいの図書館出版局 (1987)
 - 4) 国史大辞典編集委員会：国史大辞典，吉川弘文堂，775～778 (1987)
 - 5) 松尾尊兌：大正デモクラシー，岩波日本歴史叢書，V (1974)
 - 6) 松尾尊兌：前掲5) V
 - 7) 神間稔子，小川正光：愛知教大家政学教室研究紀要，20，55～59 (1989)。創刊当初の読者は居住地がほぼ東京を中心とする関東と関西とであり，職種は医師・歯科医師や公務員・教員・軍人・会社員であり，年収は500円から1,800円の間集中している。
 - 8) 朝日新聞6月11日号 (1987)
 - 9) 山室徳子：20世紀初頭女性へのメッセージ，ドメス出版，25 (1991)
 - 10) 朝日新聞 前掲8)
 - 11) 斎藤道子：羽仁もと子一生涯と思想，ドメス出版 (1988)
 - 12) 山室徳子：前掲9)
 - 13) 内田青蔵：前掲3) 96
 - 14) 斎藤道子：前掲11)
 - 15) 神間稔子：前掲7) 55～59
 - 16) 斎藤道子：前掲11) 118
 - 17) 斎藤道子：前掲11) 120
 - 18) 木村徳国：前掲1) 12
 - 19) 西山卯三：日本の住まいⅡ，勁草書房，51 (1976)
 - 20) 「家庭之友」第一巻第一号 (1903)
 - 21) 婦人之友社：創立者の歩んだ道 婦人之友小史，18 (1968)